

農的デザイン研究所代表

書評  
髙谷栄一

## 社会的共通資本としての森

宇沢弘文、関良基 編

第1部では「森は緑のダム」であり、森林の質的な変化が洪水時の流量の顕著な減少をもたらすことを実証するとともに、第2部では森林環境と人間活動が相互に作用する中で育まれてきた思想と文化が紹介される。そして、第3部では山村住民のニーズと合致し、地域の方を活性化させる方向で制度資本を整備していくことの可能性と方策が論

述べている。森林の公益的機能、森林文化、森林を守る制度資本の三つに焦点を当て、第1部で森林の持つ治水機能、第2部で森林保全思想や地域文化、第3部で制度資本形成の在り方について展開している。

本書は、医療、川に続く「Social Common Capital(社会的共通資本)シリーズ」の3冊目となるが、社会的共通資本論を提唱してきた経済学者・宇沢弘文氏が生前にとりまとめた最後の本ともなる。



## 住民自らの管理を基本に

「TPP(環太平洋連携協定)は社会的共通資本を破壊することともに、「住民の森林利用権を尊重し、社会的共通資本として森を管理する中で森林開発を抑制し、森林を管理する地域の住民自身が自発的に行う造林・育林行為に対しては、排出権取引ではなく、比例的炭素税を財源とした補助金で支援する」制度の必要性がより納得される。

森林の公益的機能、森林文化、森林を守る制度資本は、相互に作用しながら進化を続けるものとして捉えているところにポイントはある。「政府対市場の二項対立を超え、皆で森を管理する制度資本」を守り、発展させていくことは可能であり、「人間活動の不断の働きかけ」を訴える。

じられている。昭和合併の直前に明治合併村への対抗意識から近世村落が国から森林を購入した話など、いくつもの興味深い事例が含まれている。

◇出版＝東京大学出版会  
◇価格＝5400円